

町史

とおきの話

308

「町史とおきの話」編集者

新国 勇

「愛読ありがとうございます」 —連載二十五を終えて—

お礼の気持ちから
はじまった連載

「町史とおきの話」は月号をもって終了します。広報だみ誌上で平成七年に掲載をはじめから通算で三〇八回、二十五年八か月にわたる連載となりました。これは平成元年に着手した只見町史編さん事業がきっかけです。当時、資料の収集や聞き取りで町民のみなさんにはたいへんなお骨折りをかけていました。その恩返しにと、編

さん真つ最中だった先生方の協力を得て連載を始めたのです。最初の十六年分の連載は『只見とおきの話』として平成二十二年に刊行されました。町制施行五十周年を記念する事業でつくられたものですが、福島県出版文化賞を受賞する榮譽にも輝きました。

長続きの秘訣は ギブ・アンド・テイク

平成十六年に町史編さん事業が終了します。その後も町によるブナ林総合学術調査や文化財調査が続きました。一方、国立歴史民俗博物館、森林総合研究所、日本常民文化研究所、神奈川県立歴史民俗博物館、森林総合研究所、神奈川大学などから大勢の研究者が来町するようになりました。只見町史が呼び水となって、只見の魅力が知れ渡った結果といえます。来町する研究者は町が収集した資料の提供を求めてきます。しかし時間と労力とお金をかけて集めたものをタダで見せるわけにはいきません。そこで

執筆は 一年以上前から準備

一つのテーマで執筆する連載は半年間とし、毎月読み切りとしました。ネタ不足では書けませんから、執筆は一年以上前から頼んでおく必要があります。数年後の掲載を念頭に執筆者を選び、テーマを絞ったうえで原稿を依頼していました。反省点としては町民の執筆がすくなくかつたことです。これはなかなかむずかしい課題でした。

お金のからない ウイン・ウイン方式

大学や博物館の研究者は、その道のプロですから、ものを書けば原稿料が発生します。しかし、町が協力する代わりに原稿



▲只見町の価値を高めた只見町史



▲国立歴史民俗博物館による古典籍の調査

料は無償ということでした。また、研究者は助成金をもらってきていますので、成果を報告しなければなりません。そこで町民向けのシンポジウムや講演会を開いてもらうこともお願いしました。研究者側は社会貢献と実績づくりになり、町はお金をかけずに調査結果を得ることができず。双方ともウイン・ウインの関係というわけです。これまでに「民具は世界を結ぶ」(平成十八年十一月、神奈川大学)、「只見の生き物たちがもたらす森の恵み」(平成二十二年一月、森林総合研究所)、「奥会津の戦国文化をさぐる」(平成二十九年六月、国立歴史民俗博物館)などを季の郷湯ら里で開催してもらいました。

興味深いテーマを 掘り下げる

連載によって、論文発表前の情報をお知らせできたものがあります。稲葉修氏の只見産淡水魚の総確認種目録、薄葉満氏の只見産植物の未記載種目録、柳内壽彦氏の中世の只見地方、久野俊彦氏の中世古典籍の系譜などです。また、町史には未記載だった鈴木克彦氏の「只見せんめえ物語」や飯塚恒夫氏の「只見でマトンが食べられるようになった理由」など興味深い話も掲載できました。

おらが町はずいべ

只見町は只見町史や文化財調査報告書などの学術報告書を数多く刊行しています。只見町ブナセンターが発行する紀要や解説本も多数にのぼります。さらに関係する講座やシンポジウムもたくさんあります。これほど大量の郷土研究書を持ち、シンポジウムを開催している自治体は全国でもまれです。いままですら進められてきた事業によって町の真価はますます高まっています。そして、子どもからお年寄りまで「おらが町はずいべ」と誇れるようになれば、人とモノが集まる魅力あふれる只見町となっていくことでしょう。